

第2部 上御倉古墳測量調査報告



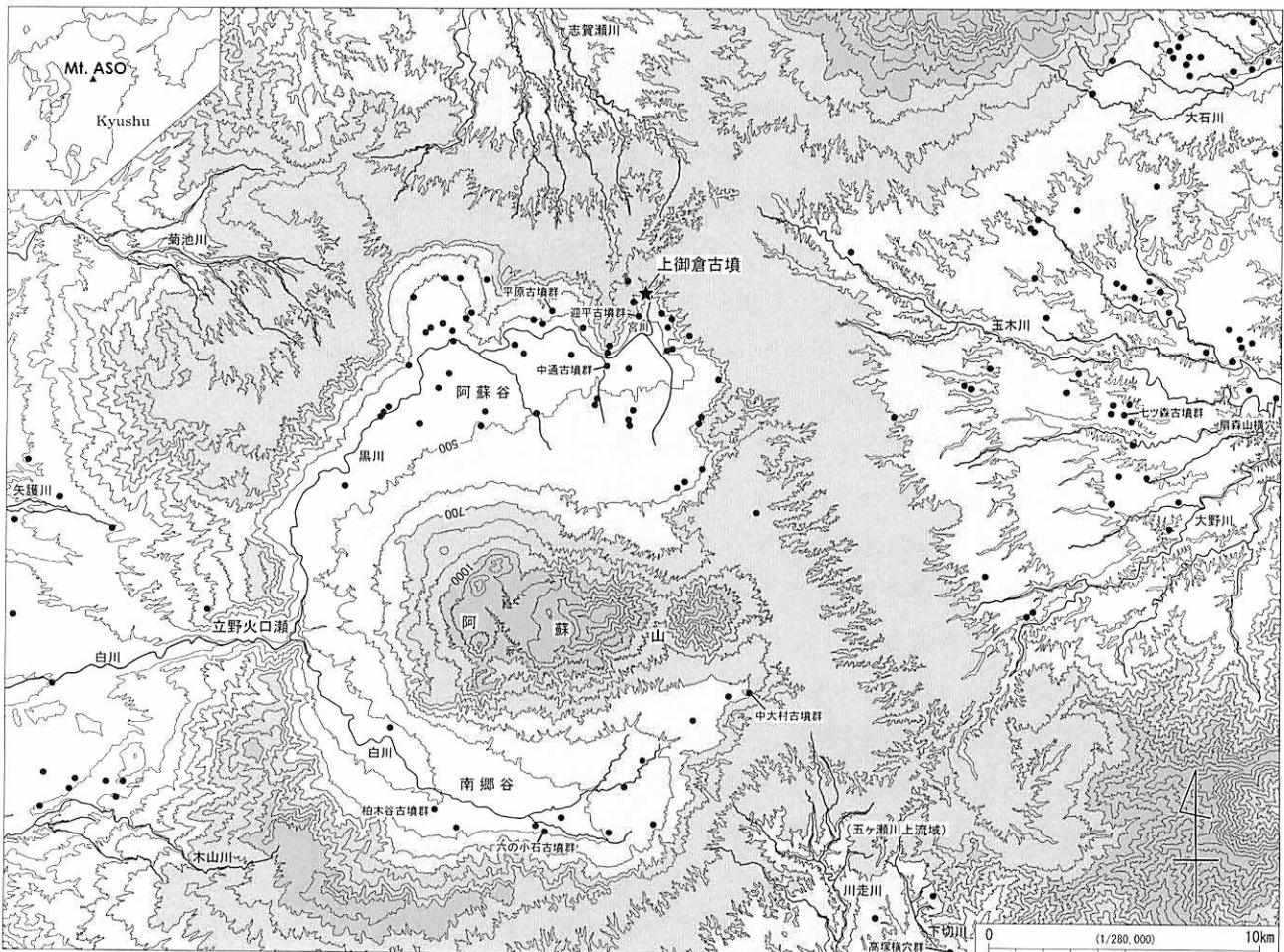
2017/8/31

一 古墳の位置と調査経過

古墳の立地 上御倉古墳は、熊本県阿蘇市一の宮町手野宮の前 2295 番地に所在する。その東約 55 m には下御倉古墳があり、両者あわせて手野古墳群（乙益 1962）あるいは西手野古墳群（野田 1983）と呼ばれる。そこは、阿蘇谷北東隅の北外輪山裾部、象ヶ鼻と古城ヶ鼻に挟まれた谷筋にあたり（第 36 図、図版 10 - 1）、古墳の北東すぐには國造神社が鎮座している。

過去の調査 上御倉古墳、下御倉古墳とも横穴式石室を内部主体とし、いずれの石室も江戸時代には開口していたらしい（乙益 1962）。これら石室の実測図がはじめて提示されたのは、『熊本県文化財調査報告』第 3 集（乙益 1962，以下 1962 年報告）においてである。新聞報道によれば、熊本県立山鹿高等学校考古学部による両古墳の実測調査が 1958 年 8 月下旬に実施されているから（熊本日日新聞社 1958.9.2）、1962 年報告掲載の実測図はこのときに作成されたものの可能性があるが、確証を得ない。羨道の前門近くに立ててあった板石に白色と黄色による装飾文様が描かれているとされたのも、この山鹿高校による調査時である（熊本日日新聞社 1958.9.2，原口 1976）。しかし、現在、この板石の存在は確認できない。なお、両古墳ともこれまでに墳丘測量図が示されたことはない。

ところで、1962 年報告に示された石室実測図には水準線が描かれていない。そのため、断面図の水平はスケールバーを基準に推測するしかないが、そうした場合、上御倉古墳では羨道の天井が羨門に向かってレベルを下げ、一方、下御倉古墳ではレベルを上げるような印象を受ける。これらのうち、少なくとも今回報告する上御倉古墳については、1962 年報告から受ける印象とは異なり、羨道の天



第 36 図 阿蘇地域の古墳分布と上御倉古墳の位置

第6表 上御倉古墳基準点の現場座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高	備考
F01	-14.000	0.000	549.509	石室中軸上
F02	-14.000	-2.000	549.698	
F03	-14.000	5.000	549.138	
F04	-6.000	-2.000	553.485	
F05	-4.000	-2.000	554.951	
F06	0.000	-2.000	555.871	
F07	0.000	0.000	555.861	玄室内原点S00と同一点
F08	0.000	-8.000	553.878	
F09	0.000	2.000	555.297	
F10	-3.000	0.000	555.324	石室中軸上
F11	7.000	0.000	553.044	石室中軸上
F12	-3.678	3.915	553.947	
F13	-5.566	14.513	549.472	
F14	6.736	9.335	550.948	
F15	15.406	4.419	549.356	杭撤去
F16	2.870	12.305	550.635	
F17	12.863	23.519	546.367	2015年A7と同一点
F18	-23.197	1.193	546.045	杭撤去
F19	-20.411	-10.301	548.582	杭撤去
F20	-23.070	14.495	545.975	杭撤去
F21	15.835	32.748	545.579	
F22	7.402	24.387	546.299	
F23	9.464	49.790		
F24	2.539	56.264	544.268	
F25	-2.976	57.352		
F26	-4.572	55.464		下御倉古墳墳頂
F27	5.700	60.838	542.994	
F28	-7.949	55.844		
F29	-19.240	46.662		

第7表 上御倉古墳基準点の国土座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高	備考
F01	-1283.607	11525.265	549.509	石室中軸上
F02	-1282.814	11523.424	549.698	
F03	-1285.580	11529.851	549.138	
F04	-1275.462	11526.585	553.485	
F05			554.951	座標未計測
F06	-1269.946	11528.952	555.871	
F07	-1270.740	11530.792	555.861	玄室内原点S00と同一点
F08	-1267.583	11523.440	553.878	
F09	-1271.529	11532.625	555.297	
F10	-1273.494	11529.606	555.324	石室中軸上
F11	-1264.313	11533.556	553.044	石室中軸上
F12	-1275.664	11532.931	553.947	
F13	-1281.585	11541.918	549.472	
F14	-1268.240	11542.030	550.948	
F15				杭撤去
F16	-1272.961	11543.226	550.635	
F17	-1268.217	11557.476	546.367	2015年A7と同一点
F18				杭撤去
F19				杭撤去
F20				杭撤去
F21	-1269.140	11567.130	545.579	
F22			546.299	座標未計測
F23	-1281.729	11580.262		
F24	-1290.652	11583.470	544.268	
F25	-1296.147	11582.288		
F26				座標未計測、下御倉墳頂
F27	-1289.562	11588.921	542.994	
F28				座標未計測
F29				座標未計測

井はほぼ水平である。今後、下御倉古墳についても確認する必要があるだろう。なお、『熊本県装飾古墳総合調査報告書』によれば出土遺物には直刀1点、刀子片1点があるとされるが(原口1984)、他の文献ではこれを確認できない。また、野田拓治は「前庭部付近から須恵器類とともに円筒埴輪の破片を採集した」と記すが(野田1983:p.41)、円筒埴輪の存在は確認できない。

今回の調査 熊本大学文学部考古学研究室では2001年度から、熊本県地域における古墳動向の解明を調査・研究活動のテーマの1つとし、県内各地で継続的に古墳の調査を行ってきた。2010年度からは阿蘇地域をフィールドに加え、阿蘇市長目塚古墳出土遺物の再整理作業や平原古墳群の発掘調査などを実施してきた。ここで報告する上御倉古墳の調査もその一環となるものである。

上御倉古墳では、横穴式石室の現状実測から調査を開始した。2015年7月18日、9月1～10日の計11日間で石室の実測調査を、9月14・15日にはSfM (Structure from Motion) による石室の3次元計測を実施した(第1次調査)。3次元計測を行ったのは、玄室床面に落下している石屋形の屋根石が障害となり安全に脚立を据えることができなかつたため、オルソ画像を作成し玄室高所の実測図を補綴することが目的であった。ところが、はからずも翌2016年4月に発生した平成28年熊本地震により、文化財にとっての3次元データの重要性を痛感することとなった。

2016年度は熊本地震の影響を考慮し、阿蘇地域での調査の実施を断念した。しかし、2017年度には関係各位のご援助を得て調査を再開することができた。4月27日、8月26日～9月4日の計11日間で墳丘の測量調査を、9月6～8日にはSfMによる墳丘の3次元計測を実施した(第2次調査)。測量は、レベルを使って等高線を探し、その座標をトータルステーションで計測して方眼紙に記入、等高線を描くという方法によった。この方法は、電子平板に比べて学生の地形を読む力の向上には有効であり、また従来の平板に比べると距離誤差の心配はない。測量の基礎を教育する大学にとってはもっともふさわしい方法なのかもしれない。なお、墳丘周辺で須恵器片数点を採集している。

今後、古墳群としての評価を行うためには、下御倉古墳の墳丘および石室の図面作成が不可欠である。その実現を模索したいと思う。(杉井)

二 墳丘の構造

上御倉古墳は、阿蘇カルデラ北半部を占める阿蘇谷の北東隅、北外輪山の麓に位置する（第36図、図版10-1・2）。そこは、北外輪山から南へ突出する2つの岬状の地形、象ヶ鼻と古城ヶ鼻に挟まれた谷筋にあたり、黒川右岸に注ぐ宮川が南流している。宮川の中流右岸には國造神社が立地し、そのすぐ南を宮川の支流、宮園川が東流する。上御倉古墳が立地するのは、國造神社神殿からみれば宮園川を挟んだ南西約150mの地点、東に傾斜する斜面地である。

上御倉古墳の東約55m、斜面をやや下った場所には下御倉古墳が立地する。この2つの古墳は、あわせて手野古墳群（乙益1962）あるいは西手野古墳群（野田1983）と呼ばれる。現在、2つの古墳のあいだには阿蘇淡水魚センターがあり、鱒などを飼育するための水槽がいくつか築かれている。センターの建物や水槽が築かれる以前、1976年12月に撮影された空中写真をみれば（図版10-1）、2つの古墳の周囲には段々畑が広がっていたことがわかる。いまもかつての段々畑の地形は残されているが、耕作は行われていない。

阿蘇淡水魚センターの西側にある小道をはさんで、上御倉古墳は立地している（第37・38図）。この小道は古墳の周囲を取り囲むようにめぐっており、その造成によって墳端のほとんどが削平されている。なかでも、淡水魚センター敷地に面する墳丘東側の削平がはげしく、削平面の高さが2mを超える箇所もある。また、北側の小道沿いも削平が顕著である。現在、墳丘はその北西斜面を除いて樹木に覆われ、また淡水魚センターに面した大きな削平面には植栽が行われている。

さて、上御倉古墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。石室は墳丘の南南西方向に開口する（図版11-2）。石室の主軸方向はN 23° 14' 45" Eである。

墳丘最高点の標高は555.888mである。標高555.0～555.2mあたりを境にしてその上方は傾斜がゆるやかになり、墳頂にはわずかな平坦地形が形成されている。ただし、明確な水平面をなしているわけではない。

墳丘の西側から北側の斜面は、ほかと比べて傾斜がゆるやかである。西側は21～22°、北側は25°前後の傾斜であるが、東側では30°前後となる。石室が開口する南側の墳頂から羨門天井石にかけてがとくに急傾斜で、37°前後の傾きがある。

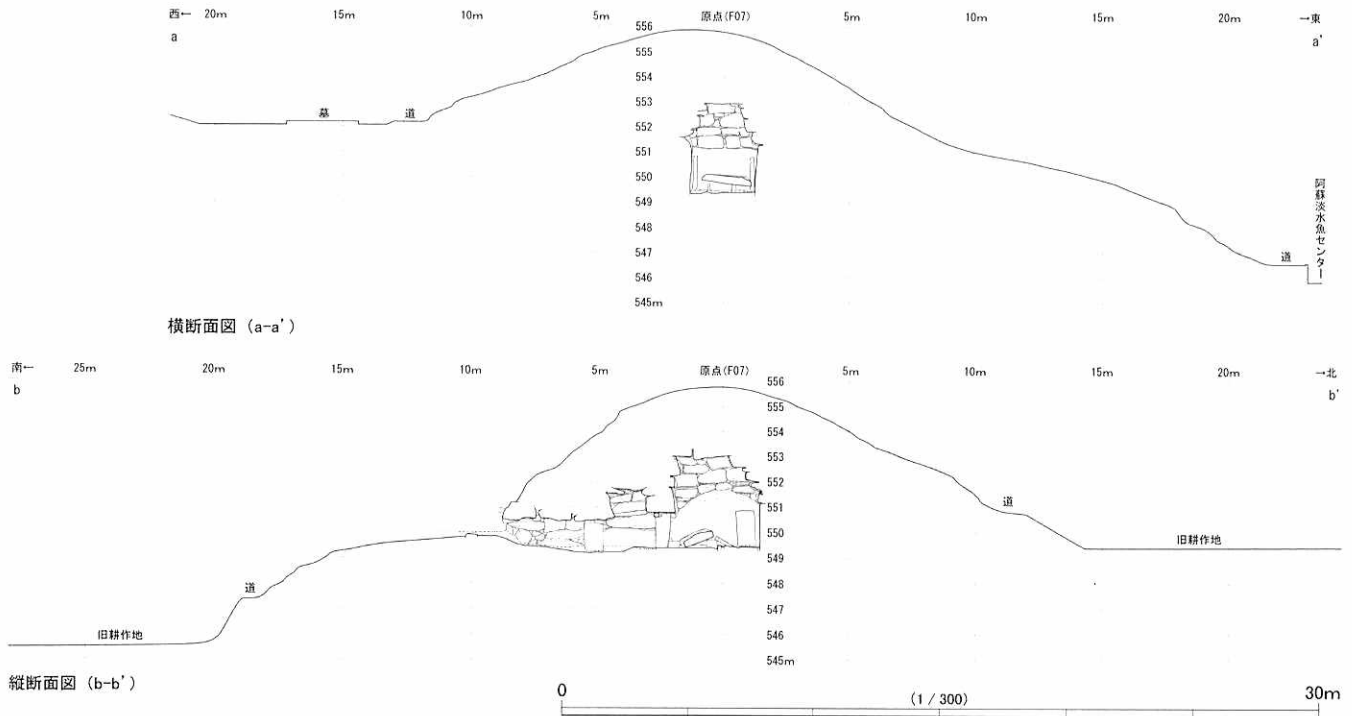
墳丘の北東側から東側では、墳頂からの斜面が標高551.2～551.0m付近で緩傾斜となり、550.2～550.0mあたりにかけて平坦面を形成している。そして、北東側では大きくえぐるような削平がおよんでいるため平坦面以下の墳丘面は残存しないが、東側では550.0m付近からふたたび墳丘面が傾斜し墳頂に至る。こうした状況をみれば、当古墳は2段築成であり、ここにみられる平坦面は段築テラス面を反映したものであると推測できる。しかし、この平坦面は墳丘の南側に連続しない。また、本古墳は西から東への傾斜地に立地しているため、墳丘の北側から西側においてはもともとの地形がこの平坦面の標高よりも高い位置にある。こうしたことから、段築が墳丘を全周していたとみるよりは、旧地形傾斜の下方、すなわち墳丘の東側を中心とした範囲にのみ形成されていたとみる方が蓋然性が高い。なお、墳丘南側の石室開口部の西側では標高550.6m付近、東側では550.0m付近から傾斜がゆるやかになり、549.0m前後にかけて平坦地形となっている。ここは石室の前庭部から墓道にかけての場所であるから、この平坦面はそれらに関連するものの可能性が高い。

ところで、墳丘東側の平坦面の標高550.0～551.2mを後述する石室各部の高さと比較すれば、羨道右側壁腰石上面の550.1m前後、羨道天井石下面の550.5m前後、前室左右側壁腰石上1段目石材

二 墳丘の構造



第 37 図 上御倉古墳墳丘測量図



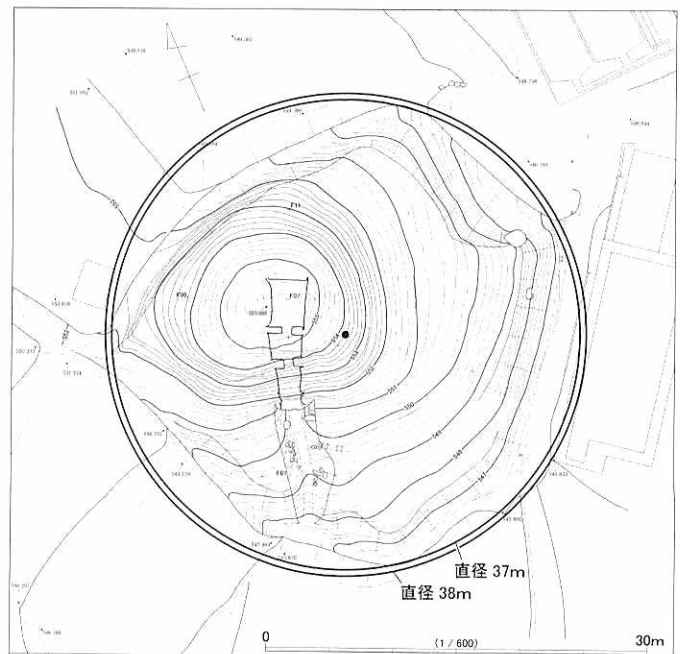
第38図 上御倉古墳墳丘横断面図・縦断面図

上面の 550.6 m 前後、玄室棚石下面の 550.8 m、玄室右側壁腰石上面の 551.0 ~ 551.4 m、玄室奥壁腰石上面の 551.2 m といった数値に近い値であることがわかる。こうした点から、墳丘段築 1 段目と石室下半の構築が密接な関連をもって行われた可能性が高いと推測される。

現状の墳丘残存部の規模は、直径 33 ~ 35 m 程度、北側からみた高さ約 3.7 m、南側からの高さ約 9.7 m である。上述したように、墳端のほとんどが削平されているため、本来の墳丘の大きさを推定することはきわめて難しい。そこで、現状の墳丘を取り巻く小道は墳端部を削平することによって形成されたと考えられること、淡水魚センター敷地に面する部分や墳丘の北側がとくに大きな削平を受けていると予想されることを念頭におきつつ、墳丘周囲の小道がほぼ内側に含まれる正円を描いてみると、直径 37 ~ 38 m の円墳となった(第 39 図)。この場合、石室の位置が墳丘の中心線よりかなり西側に片寄ることになるが、段築を施すなどの造作により東側をとくに強調した墳丘構造であった可能性を想定し、1 つの試案として提示する。

なお、現状の墳頂面から玄室天井石下面までの距離はおよそ 2.8 m である。羨門の前には墓道状の落ち込みがあり、その長さは約 9 m である。墳丘面の各所では葺石と思われる石材が観察される。野田拓治は円筒埴輪片を採集したと記すが(野田 1983)、今回の調査では見出すことができなかった。

(安原・杉井)



第39図 上御倉古墳墳丘形態復元想定図

三 石室の構造

上御倉古墳の内部主体は、複室構造・両袖式の横穴式石室である（第40図、図版12～20）。その複室は、藏富士寛の分類によれば、「前室がしっかりとした空間をもつ室空間創設型」（藏富士2009：p.12）に該当する。全長（奥壁から羨門に架かる天井石前面までの水平距離）は、10.2 mである。石材は阿蘇溶結凝灰岩を主とし、玄室屍床の一部に安山岩が用いられる。石室主軸は国土座標北から $23^{\circ} 14' 45''$ 東に振れ、石室は南南西方向に開口する。なお、石室主軸は、玄室幅のほぼ中央を通るように設定したものである。

以下の記述においては、石室主軸上で石屋形前の基準点をF 07とし、その地点で直交するラインを0 mラインと表記する。例えば、1 mラインの場合はF 07から羨道方向に1 m地点の石室横断ラインを示す。また石室の左右については、羨道側から玄室側をみた場合の左右とする。

玄室 玄室の平面形は、石室主軸方向に長い長方形である。その平面規模は現状の床面で、長さ3.67 m（主軸）、幅2.70 m（0 mライン）である。また、左・右側壁沿いでの長さはそれぞれ3.65 m・3.70 m、前壁・奥壁沿いの幅は2.55 m・3.06 mである。このことより、前壁側から奥壁側に向かうにつれやや幅広になっていることが分かる。

玄室床面は現在、若干の土砂に覆われている。今回の調査は石室の現状実測を目的としたため、本来の床面の検出は行っていない。そのため、築造当初の床面の様相は不明である。したがって、後述する高さに関する数値は、いずれも現状の床面からの計測値である。しかし、石屋形の床面に石敷きとみられる石材が露出していることから、土砂による埋没は軽微なものと推測される。

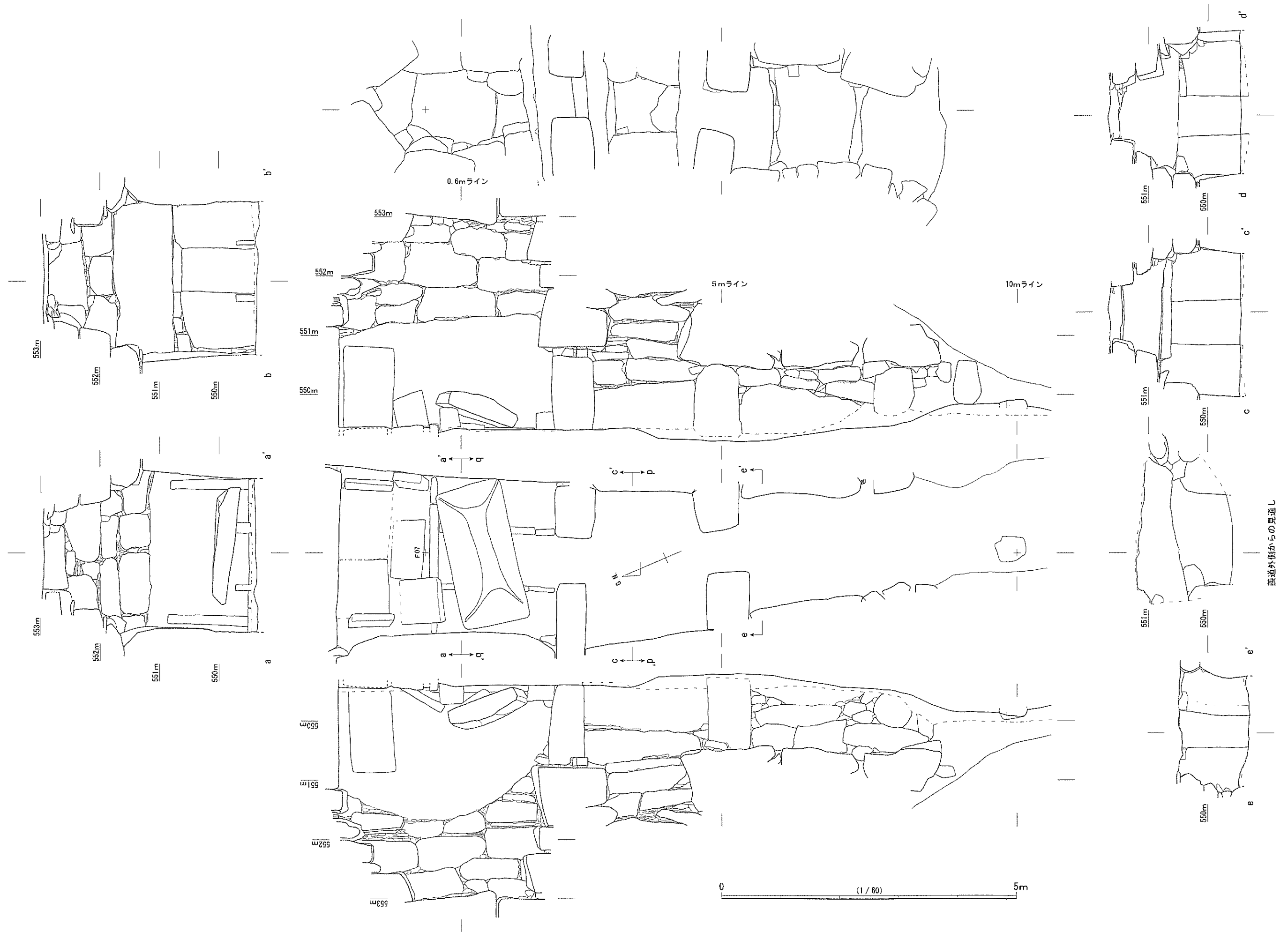
前壁は、玄門を構成する2つの立柱石の上に長大な楣石を置き、方形石材を2段積みすることで形成される。左立柱石は前後長約50 cm、前面の幅（玄室壁面からの突出長）86 cm、後面の幅（前室壁面からの突出長）1.1 m、現状床面からの高さ1.35 mである。一方、右立柱石は前後長約65 cm、前面の幅85 cm、後面の幅84 cm、現状床面からの高さ1.05～1.25 mを測る。右立柱石は高さが不足するため、石材を1段積みすることで、左立柱石の上面と高さをそろえている。また、右立柱石は側壁から独立しているのに対し、左立柱石は側壁に組み込まれている。

これら立柱石の上に置かれる楣石は、左右長2.55 m以上、上下長約1.0 m、下面における前後長1.05 mである。楣石の両端は左右両側壁の腰石に架け渡されている。なお、右側腰石の上辺右角についてはL字形の削り込みが施され、楣石と組み合わせられる。こうした石材の上辺角をL字状に加工し、そこに上位石材の下辺角を組み合わせる技法、いわゆる切組積みは玄室の各所にみられる。

こうして形成された玄門の各部寸法を示すと、上辺幅75 cm、現状床面での下辺幅75 cm、現状床面からの高さ1.39 mである。また、主軸上での奥行きは57 cmである。

楣石より上位の石材は、およそ 68° の傾斜角で積み上げられている。積み上げに際しては、隅角消しの造作が行われるとともに、大型石材の間に板石や小石材が積まれ、各段上面が水平になるよう調整される。なお、楣石上部2段目石材の上辺右角にはL字形の削り込みが施され、側壁石材と組み合わせられている。

奥壁および左右両側壁は長大な腰石を1石配置し、その上に方形の石材を持ち送りながら積み上げることによって形成される。奥壁の腰石は、上辺長約2.65 m、現状の床面での下端長3.02 m、現状床面からの高さ1.6～1.7 mである。腰石上部には石材が4段積み上げられ、1段目から徐々に持ち送られている。その傾斜角は約 48° であり、石室内でもっとも内傾している。



第40図 上御倉古墳石室実測図

左側壁の腰石は上辺が大きく丸みを帯びているため、現状床面での下端長のみを示すと、3.65 mである。また、現状床面からの高さは、最大2.15 mを測る。腰石上位の石材は3段積みだが、丸みを帯びる腰石上辺左右を埋めるように石材が充填されたのちに行われている。腰石上1段目の石材から持ち送られており、その傾斜角は約 58° である。一方、右側壁の腰石は、上辺長約3.4 m、現状床面での下端長3.7 mであり、現状床面からの高さは1.55～1.95 mである。腰石上部の石材は3段積みで、1段目から 62° の角度で徐々に持ち送られている。腰石上2段目中央の石材の上辺右角にはL字形加工が施され、切組積みされる。なお、左右側壁および奥壁では、腰石上位の石材から隅角消しの造作が行われている。また、壁面各所にみられる石材どうしの隙間には、白色粘土が充填されている。こうした造作は玄室のみならず石室各所で確認できる。

天井は2枚の石材で構成されている。その平面形はいびつな六角形を呈する。奥壁側の石材のほうが大きく、天井面の3分の2を占めている。天井石下面の標高は、前壁際・奥壁際ともに553.00 mであり、現状床面からの高さはおよそ3.58 m（0 mライン）である。

遺体安置施設 玄室には遺体を安置する施設として、石屋形と2つの屍床が存在する。

石屋形は奥壁に平行して設置されている。屋根石は前方へ落下しており、2つの屍床および中央通路を覆っている。現在では、屋根石を支えていた2枚の側石のみ原位置を保っている。当石屋形は、玄室から独立していること、阿蘇石等の特別な石材を使用し、精緻な加工を施すなど、構築の主体者として石工の関与が想定できるものであることから、石屋形I類に分類される（藏富士2010）。

落下している屋根石は、前壁側長辺が2.4 m、奥壁側長辺が2.25 m、短辺は左右ともに1.1 mである。このことから、前壁側長辺が若干長いことが分かる。厚さは23～35 cmである。屋根石は寄棟造を模しており、棟部分は浮き彫りにより表現されている。現状の前壁側の面がもつともていねいに面取りされていることから、この面が前壁側に向いていたと推測される。つまり、目に触れる部分を重視し、よりていねいな調整が行われたとみられる。なお、石材下面は平坦に整形されている。

屋根石を支えていた2枚の側石は、大型の板石である。左側石は現状床面からの高さ1.30～1.35 m、幅70 cm、厚さ16 cm、一方右側石は現状床面からの高さ1.35 m、幅82 cm、厚さ13 cmである。両側石の間隔は上面で2.2～2.3 mであり、屋根石長辺の長さとも一致する。屋根石を原位置にもどして石屋形の内法を復元すると、上端・下端の幅はそれぞれ2.12 m・2.15 m、高さ1.4 m、奥行き1.16 mとなる。左右側石のほかに、玄室内には石屋形の部材（袖石か）と考えられる板石が3枚存在する。1枚は右側壁に立てかけられおり、もう1枚は石屋形左側石の前面に倒れている。後者は、奥壁側の辺が土に埋没している。残りの1枚は石室左側壁の実測図に示されているように、屋根石に覆われた状態で横たわっている。この石材の隅角にはL字状加工が施されている。

先述の通り、石屋形の床面は石敷きとみられ、前後2列にわたり確認できる。以下、奥壁側の列を後列、前壁側の列を前列とする。後列には、奥壁に沿って2枚の石材が配置される。左・右石材の幅はそれぞれ0.95 m・1.2 m、長さはともに80 cmである。一方前列には、幅1.05 m、長さ55 cmの石材が1枚設置されている。これら石敷き上面の標高は549.45 mであることから、その他の床面における築造時のレベルもこの数値と大きく変わらないものと思われる。

なお、1962年報告掲載の実測図をみると、石敷きの状況が若干異なっている。まず、後列には石屋形の左側石に接した1枚の石材しか表されていない。一方前列には、2枚の石材が描かれている。1枚は今回報告の石材と同位置にあり、この石材の左側にもう1枚石材が設置されている。後者の位置には現在、上述の倒れた板石が存在するが、これが1962年報告に描かれた床面石材と同じものか

どうかは判然としない。約 60 年の間に掘り起こされた可能性も考えられる。

石屋形の前面には一定の空間が設けられ、玄門側の屍床と空間を区切るための仕切りが設置される。仕切りは 3 枚の石材で構成され、0.15 m ライン上に奥壁と平行になるように配置される。両端の石材は、長さ 43 cm、幅 10 ~ 15 cm であり、両石材とも側壁に接する辺の隅角が丸く加工されている。これらに挟まれる石材は、長さ 1.75 m、幅 16 cm である。

2 つの屍床は、玄門から続く中央通路を挟んだ左右に側壁と平行になるように設置されており、石屋形とあわせてコノ字形の屍床配置となる。両屍床は奥壁側の小口および中央通路側の側辺に板石を立てることで形成される。奥壁側小口の石材は、石屋形との空間を区切る仕切り石を兼ねている。中央通路側の側石は、左側屍床で 3 枚、右側屍床で 4 枚の板石で形成される。これら石材の高さはそれぞれ異なり、両屍床とも奥壁側と前壁側の小口に接する石材が 20 ~ 25 cm ほど高い。左側屍床は長さ 2.0 m、幅 70 ~ 75 cm、右側屍床は長さ 2.0 m、幅 80 cm であり、およそ同じ大きさである。

なお、1962 年報告の石室右側壁図と比較すると、いくつかの相違点がみられる。まず、中央通路床一面に 1 枚の石材が配置されている様子が見取れる。また、右側屍床の側石はいずれも現状より 15 cm ほど高く、石材の形状がより明瞭にうかがえる。このことから、中央通路および屍床は現状で 15 cm 程度土砂に埋没している可能性がある。

前室 前室の平面形は、石室主軸方向を短軸とする長方形である。その平面規模は、現状の床面で長さ 1.91 m (主軸)、幅 2.46 m (3.5 m ライン) である。また、左・右側壁沿いでの長さはそれぞれ 2.1 m・1.65 m と、左側壁側のほうが長い。後壁 (玄室側壁面)・前壁 (羨道側壁面) 沿いの幅はそれぞれ 2.7 m・2.35 m を測り、後壁に向かって若干幅広になっていることが分かる。

床面は土砂に覆われており、屍床や石敷きなどは確認できない。しかし現状床面の標高は 549.25 ~ 549.45 m と玄室床面の標高と大きく変わらないことから、埋没は軽微なものと同推測される。

後壁は 2 つの立柱石の上に楣石を配し、その上に石材を 1 段積みすることで形成される。左立柱石の上辺右隅には方形の削り込みが施されており、そこに長方形の石材が組み込まれ、右立柱石の上へと架け渡されている。こうした方形削り込みは後述の前門左右立柱石の羨道側にもみられる。前室からみた玄門の寸法は、上辺幅 73 cm、現状床面での下辺幅 75 cm、現状床面からの高さ 1.2 m である。

左右両側壁は、腰石を 1 つ配置し、その上部に石材を 4 段積みすることで形成される。左側壁の腰石は上辺長約 2.1 m、現状の床面での下端長 2.1 m、現状床面からの高さ 70 ~ 75 cm である。この石材の上辺両角には、L 字形加工がみられる。腰石上位の石材から約 56° の傾斜角で持ち送られている。一方右側壁の腰石は上辺長約 1.7 m、現状の床面での下端長 1.65 m、現状床面からの高さ 75 ~ 80 cm である。腰石上位の石材から約 62° の傾斜角で持ち送られている。なお、前室壁面においては隅角消しの処理は行われていない。

前壁は、2 つの立柱石の上に巨大な楣石を置き、その上に石材を 1 段積みすることで形成される。左立柱石は前後長約 75 cm、前面の幅 (前室壁面からの突出長) 95 cm、後面の幅 (羨道壁面からの突出長) 70 cm である。一方右立柱石は前後長 60 ~ 80 cm、前面の幅 68 cm、後面の幅 45 cm である。2 つの立柱石はいずれも側壁に組み込まれている。両立柱石に載せられる長大な楣石は、羨道の天井石も兼ねている。この石材は左右長 2.2 m 以上、上下長約 1.05 m、下面における前後長 1.6 m であり、左右両端は側壁へと組み込まれている。前門の各寸法を示すと、上辺幅 75 cm、現状床面における下辺幅 71 cm、現状床面からの高さ 1.2 m である。また、奥行きは 72 cm (主軸) である。

天井は 1 枚の石材で構成され、平面形は石室主軸方向に長い長方形を呈する。天井高は、現状の床

面から2.3 m (3.5 mライン)である。また、天井石下面は水平で、その標高は551.75 mである。

羨道 羨道の概要について述べる前に、その範囲について示しておく。まず側壁の範囲は、平面図で確認すると、左側壁が前門立柱石から数えて4つ目の石材、右側壁が前門立柱石から数えて2つ目の方形石材と認識する。この場合、両側壁よりも羨門の天井石のほうが前方に突出するため、前門から羨門に架かる天井石前面までを羨道の範囲と捉えると、長さは3.33 m (主軸)となる。また、前門・羨門沿いにおける幅は、現状の床面で1.95 m・1.85 mを測る。なお、羨道部分は石室主軸に対して5°程度東へと振れている。

羨道床面は現在、土砂に覆われている。現状の床面の標高は、前門部で549.25 m、羨門部で549.85 mと入口側に向かって次第に高くなる。羨道床面が一定の高さで構築されたとすれば、羨道入口付近は60 cm程度土砂に埋没している可能性がある。

前門は2つの立柱石に天井石が置かれることで形成される。羨道部から前門をみた場合、左右立柱石の上辺角には方形削り込みが確認できるが、長方形の石材は架け渡されていない。羨道からみた前門の寸法は、上辺幅75 cm、現状床面における下辺幅80 cm、現状床面からの高さ1.27 mである。

側壁の様相は、左右で大きく異なる。まず、右側壁についてみると、前門側に腰石が配置される。当石材の右端は土砂に埋没しているため現状での長さを示すと2.08 m、高さは最大85 cmである。この腰石に接して、幅64 cm、現状床面からの高さ82 cmの方形石材が設置される。当石材は羨道へ突出せず、側壁に組み込まれているが、その形態から羨門立柱石とみられる。この立柱石は1962年報告の実測図には表現されておらず、今回認識に至ったものである。腰石および立柱石上には1～2段の石積みが行われ、壁面が形成される。なお、立柱石より南側、つまり石室の外へと続く石積みは、前庭部にとまなうものと考えられる。次に左側壁をみると、前門立柱石に接して腰石が配置される。この石材は、長さ1.92 m、現状床面からの高さ34 cm前後と、右側壁のものに比べてやや小ぶりである。また、腰石の隣に右側壁のような立柱石はなく、大小の石材が配される。これら石材と腰石上に石材が積み、標高550.10 mで水平にそろえられている。その上に2段目石材が積み、壁面が形成される。なお、右側壁はほぼ垂直であるが、左側壁は67°の傾斜角で持ち送られている。

先述の通り、羨門立柱石は右側壁にのみ設けられる。しかし、左側壁の羨門部に配置された石材(平面図上で前門立柱石から数えて4番目の石材)も、やや高さのある方形石材である。しかし、大部分が土砂に埋もれており、その全形が不明なため、立柱石と判断することは難しい。今後調査により確認すべき課題である。なお、羨道外からみた羨門の寸法を示すと、上辺幅1.8 m、現状床面における下辺幅1.67 m、現状床面からの高さ77 cm前後である。

天井部は前門の楣石を兼ねる石材を含め、巨大な石材3枚で構成される。1962年報告では天井が羨門に向かってレベルを下げるようにみえるが、実際にはほぼ水平である。その天井石下面の標高は550.45 mである。天井高は、現状の床面から前門部・羨門部でそれぞれ1.26 m・0.77 mを測る。

石室構築の手順 石材の積み方から、石室構築の手順をおおまかに復元することができる。はじめに玄室から順に腰石および立柱石を配し、石室全体のプランを形成する。その後、羨道部の左右壁を積み上げ、完成させると同時に、前室左右壁の腰石上1段目石材も積み上げる。この際、羨道部の左右壁の石積み上面と前室左右壁の腰石上1段目石材上面は標高550.60 m前後にそろえられる。この標高は、墳丘構造で述べた通り段築テラス面の標高と近似することから、石室と墳丘の構築は密接な関連性をもって行われたとみられる。続いて前門の楣石を積み、羨道部分に天井石を架構することで、羨道を完成させる。その後、玄門の楣石を配置し前室の壁面を持ち送りながら積み上げ、最後に天井

石を架構する。玄室については、楣石上面の標高 551.80 m で一度高さをそろえるように左右壁および奥壁を積み上げる。その後も、標高 552.30 ~ 552.60 m、標高 553.00 m で石材上面をそろえつつ、壁面を持ち送りながら積み上げていく。最後に天井石を架構し、玄室が完成となる。

装飾と赤色顔料 過去の調査では、羨道の前門付近に倒れた板石に装飾が確認されたと報告されている（原口 1976）。その板石は厚さ 15 cm、上下端の幅約 80 cm、左右の長さ約 1.5 m の長方形を呈するものであり、白色で連山が描かれ、その下方は黄色に塗られた後、人物が描かれていたという。また人物は地塗りと同色であったため、腰部から下は明瞭でなかったとされる。

当板石は羨道からみた前門の寸法より一回り大きいこと、また倒れていた位置から判断して、前門閉塞石と思われる。残念ながら今回の調査では、この板石を確認することはできなかった。しかしながら、玄室から羨道の壁面にかけて赤色顔料の痕跡が確認できることから、少なくとも石室壁面に赤色顔料が塗布されていたのは確実である。ただし、かつて板石に確認されたという上記装飾文様は、ほかにみられないものであることから、誤認であった可能性も考慮すべきかもしれない。（山元）

四 採集遺物

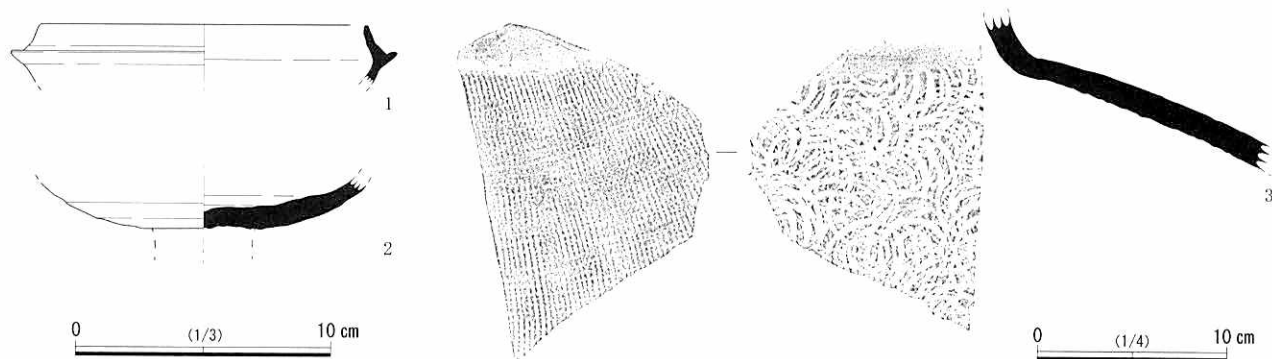
今回の調査では、古墳の墳丘斜面において複数の須恵器・土師器片を採集した。こうした土器は、墳丘祭祀にともなうものとも考えられる。ここでは図示が可能な須恵器について報告するが、それ以外のいくつかは図版 20 - 2 に示す。

須恵器 第 41 図 - 1 は須恵器の坏身である。復元口径 12.8 cm、受け部径 15 cm を測る。立ち上がりは 1.5 cm と短く、やや内傾して伸びる。口縁端部は丸く仕上げられる。内外面とも回転ナデ調整である。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。

2 は須恵器の高坏である。坏部の底部付近のみ残存する。外面は時計回りにヘラケズリが施され、内面は不定ナデにより調整される。外面には脚部の剥離痕のほか、透かしを施す際についた工具痕も観察される。焼成はやや甘く、内面灰色、外面灰白色を呈する。なお、内面に降灰が確認できないため、有蓋高坏である可能性が高い。

3 は須恵器の甕であり、頸部から肩部にかけて残存する。器壁は 1.2 cm 前後と厚く、大型品と推測される。外面は縦方向の平行タタキで調整され、内面には同心円文当具痕が残る。頸部には内外面ともにヨコナデが施される。焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈する。

小結 時期を推定できる遺物は、1 の須恵器坏身のみである。これは、口径や受け部の形態から TK 43 型式段階に比定されるものである。上御倉古墳は、従来の認識によれば前方後円墳集成編年 10 期に位置付けられていることから、互いの年代観に矛盾は認められない。（山元）



第 41 図 上御倉古墳採集須恵器実測図

五 まとめ

上御倉古墳は、熊本県阿蘇市一の宮町手野宮の前2295番地に所在する。そこは、阿蘇谷北東隅の北外輪山裾部、象ヶ鼻と古城ヶ鼻に挟まれた谷筋にあたる。上御倉古墳の東約55mには下御倉古墳があり、両者あわせて手野古墳群（乙益1962）あるいは西手野古墳群（野田1983）と呼ばれる。

熊本大学文学部考古学研究室では、熊本県地域における古墳動向の解明を調査・研究活動のテーマの1つとしているが、今回報告の上御倉古墳の調査もその一環であり、2015年度に石室実測調査、2017年度に墳丘測量調査を行った。また、石室、墳丘の3次元計測もあわせて実施した。

上御倉古墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘は西から東への傾斜地に立地している。墳丘周囲には小道がめぐっており、その造成にともない墳端の多くが削平されている。墳丘は2段築成であり、墳丘の北東側から東側の標高550.0～551.2mに段築テラス面とみられる平坦面が存在する。しかし、墳丘南側に平坦面は継続しておらず、また北および西側は旧地形が平坦面の標高よりも高い位置となることから、段築は墳丘を全周するものではなく、墳丘東側にのみ形成されたと推測される。墳丘規模は、周囲の小道を内側に含む正円を描いた場合、直径37～38mに復元できる。この場合、石室の位置は墳丘の中心線よりかなり西側に片寄るが、段築を施すなどの造作により東側をとくに強調した墳丘構造であったものと考えられる。

内部主体は複室構造・両袖式の横穴式石室であり、石室は墳丘の南南西方向に開口する。石室構造の特徴を整理すると、以下の3点にまとめられる。

1. 前室の天井は羨道部より高く、室空間をなす（室空間創設型）。
2. 玄門および前門の両袖石が内側に突出し、明確な門構造を呈する。
3. 玄室には石屋形と2つの屍床があり、これらはコの字形に配置される。

こうした構造的特徴は、熊本県菊池川流域における横穴式石室とおおむね一致する。菊池川流域では、時期が下るにつれて前室空間が拡大することが指摘されており（古城2009）、前方後円墳集成編年10期には玄室・前室・羨道の幅がほぼ同程度となる。また、当該期には腰石技法の一般化や使用石材の大型化も確認されている。上御倉古墳の場合は、腰石技法・石材の大型化が確認できる一方で、玄室・前室幅に対して羨道幅はやや狭くなることから、集成編年10期のなかでも古相の様相を示しているといえる。こうした見解は、墳丘採集の須恵器がTK43型式段階に比定されることとも矛盾せず、上御倉古墳は集成編年10期前半頃、つまり6世紀後葉頃の築造と考えられよう。

なお、石室構造の類例として、大分県別府市鬼ノ岩屋1号墳が挙げられる。当古墳は直径約31mの円墳で、内部主体は上御倉古墳と同様に複室構造・両袖式の横穴式石室である。玄室プランは正方形のため、上御倉古墳に比べて規模は小さいが、玄室奥壁側に石屋形が配置されているほか、玄門両立柱石の前室側の上辺角には方形割り込みが施されるなど、上御倉古墳との類似性がうかがえる。時期は、石室構造および出土須恵器の型式から、TK209型式段階頃と推定されている（玉川2016）。こうした石室の導入背景や上御倉古墳との関連性については、今後検討すべき課題である。

上御倉古墳は古くから開口し、阿蘇地域を代表する古墳として広く知られていたものの、石室実測図の一部が公開されていたのみであった。そのため今回の調査では、石室構造や墳丘規模・構造といった基礎資料の収集に努め、上御倉古墳の実態をより鮮明なものとした。しかし、近接する下御倉古墳についても石室・墳丘の規模・構造の解明が待たれており、残された課題は多い。今後も調査を継続し、手野古墳群さらには阿蘇地域における古墳動向の全容把握に努めたいと思う。（山元）

引用・参考文献

- 乙益重隆 1962 「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 41-70
- 熊本日日新聞社 1958. 9. 2 「阿蘇に初の装飾古墳 一の宮町『上御倉』を調査」
- 藏富士寛 2009 「九州地域の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007 年度熊本大会分科会 I 記録集、北九州中国書店：pp. 3-20
- 藏富士寛 2010 「石屋形・石棚」『先史学・考古学論究』V - 下巻、龍田考古会：pp. 597-617
- 玉川剛司 2016 「別府市内の横穴式石室」『実相寺古墳群—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書—』別府市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集、別府市教育委員会：pp. 149-154
- 野田拓治 1983 「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号、新日本教育図書：pp. 38-49
- 原口長之 1976 「上御倉・下御倉古墳（県史跡）」『熊本の装飾古墳』熊本の風土とこころシリーズ7、熊本日日新聞社：pp. 118-119
- 原口長之 1984 「上御倉古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第66集、熊本県教育委員会：pp. 73-74
- 古城史雄 2009 「肥後の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007 年度熊本大会分科会 I 記録集、北九州中国書店：pp. 21-45